

巻 頭 言

天災から人災へ——これからの精神医療の2つの正面——

一瀬邦弘 日本精神神経学会理事

Kunihiro Isse

未だ曾つて有らざるという地震が平成23年辛卯3月11日金曜日(ユリウス日2455632日)14時46分に起こり大津波を引き起こし、日本で東北地方太平洋沖地震と名付けられた。気象庁の発表では当初その大きさはマグニチュード8.8とされ、のちに9.0と訂正された。同様の地震が、貞観6年富士山大噴火の5年のち、貞観11年(ユリウス歴869年)に起こり仙台平野や石巻平野に津波が押し寄せ、「海嘯哮吼 原野道路 怒為滄溟」つまり津波が押し寄せ、原や道路はすべて一面青い海になってしまったという。この曾つての大地震はマグニチュード8.3から8.6と推定され、平野海岸部の発掘調査でこうした津波痕とみられる地層は1000年に一度くらいの間隔で確認されるという。

4月3日日曜日の今日、地震後23日目に自衛隊、米軍合同で海上大捜索が行われたが、見出された御遺体は77名で今なお捜索願の出されている行方不明者は15,000名以上という。明日からの捜索規模は縮小される。このたびの地震津波による死者・行方不明者併せて3万人近くと報じられている。

この悲惨な出来事で亡くなられた方々に心からのお悔やみを申し上げたい。それだけでなく、引き続いて避難先で命を落とされた方、不自由な生活を強いられる方々を思うと言葉がない。事態は天災からしだいに人災の要素の強いものへ変化して行く様が見える。

3月17日木曜日、地震発生から6日目、午後1時15分にわたくしは東京都多摩市にある私共の多摩中央病院玄関で福島県からのバスを迎えた。このバスは午前9時15分にいわき市の博文会いわき開成病院を出発。緊急車両として常磐自動車道を走行してきた。35名の博文会双葉病院入院患者と同院の常勤医石井医師が同乗していた。前日、湯川院長からは患者の状態について「着の身着のまま、歯ブラシなし、入浴ずつとなし」と簡潔に説明があった。もう一言「まさに脱出だったようです」と双葉病院出発の際の状況が語られた。病院駐車場で待機していた心のホスピタル町田病院(東京都町田市)の迎えの車に5名が乗り出発。当院は20名の患者をお預かりし、あいにくの無計画停電の中だったが、お茶とハンバーグカレーそして入浴で迎えた。石井医師との挨拶もそこそこにバスは次の目的地である東京都稲城市の研精会稲城台病院へと出発した。この前日の3月16日には茨城県立友部病院の土井永史院長が県庁を説得の上、双葉病院の40名入院患者をバスで受け入れている。

3月12日土曜日、地震発生の翌日、水素爆発で建屋天井が吹っ飛んだ福島第一原子力発電所(以下爆心と略す)から4kmほどにある双葉病院に10km圏内(後に20km圏内に拡大)避難命令が出され、第1陣として207名の入院患者が三春小学校などを經由し、爆心から40kmほどにある同系列の博文会いわき開成病院へ避難した。いわき開成病院の定床は162床で、双葉病院の患者を迎えて3百数十名の入院患者であふれた。博文会鈴木市郎理事長と相談し湯川泰一院長が精神神経学会元副理事長の守屋裕文先生と連絡をとり、即に応じた茨城県立友部病院土井永史院長が40名、北里大学宮岡等教授が100名、山角院院長の山梨精協と移送が次々と実現していった。

3月22日火曜日、地震から11日目には、双葉病院入院患者の第1陣207名の避難はとりあえず終えることができた。湯川院長から電話があった。金森和心会雲雀ヶ丘病院(爆心から丁度20km)の患者は栃木県精神科病院協会の加盟病院や針生ヶ丘病院(郡山市)が受け入れ、石福会四倉病院の入院患者40名も3月27日には光生会平川病院(八王子市)などへ避難を終えたようである。

地震発生から23日目の今日、放射能封じ込め施設として設計されたはずの福島原発放射能漏れは、さらに大規模に持続拡大している。これが造られた40年前と言えばコンピュータは8ビットの時代だった。PC8801や一太郎、松以前の時代である。また築40年の建物といえば、小生は自分の病院建物について水漏れは、漏電は、地震対策と心配しながら日々を過ごしている。海沿いにある原発の建築物だけは例外であろうか。佐藤栄佐久前福島県知事の反対で止められていた以外は、今まで稼働していたという。技術大国ニッポンの神話のうらで、硬直した支配構造がシロアリとして梁や柱の内部を虫食い、その屋台骨の空洞化を一気に露呈させたのが今回の地震である。

これから数十年間、福島県浜通りの活気が戻ることはなく東日本太平洋沿岸の海沿いでは放射能による機能不全が続くであろう。毎年3万人の自殺者に加え、今回一挙に3万人近い死者を出した地震津波である。経済的影響だけでなく日本人の心への影響はより大きいものになる。これと別個に福島県浜通り県民を襲った故郷喪失は、東京電力福島原発による人災の要素が強い。いま精神医療の行うべき数年単位の活動は、1つが盛岡、仙台を中心とした東日本太平洋沿岸地域ともう1つが浜通りを中心とした福島県民対応という2つの正面を持たなくてはならない。